

「愛・地球博」市民プロジェクト

国際シンポジウム「人と馬との優しい関係」

会場：2005年日本国際博覧会 瀬戸会場市民パビリオン対話劇場

会期：2005年9月6日（火）～9日（金） 午前10時～午後5時

主催：RDA Japan（国税庁長官 認定NPO法人）

後援：FRDI（国際障害者乗馬連盟）

協賛：株式会社クリニコ ジェーシーアール株式会社

大日本製薬株式会社 乗馬ライフ（オーシャンライフ株式会社）

【開催趣旨】

ウマは、古代から人と共生してきた動物の一種です。

日本でも古くから、ウマは農村部を中心に人々のパートナーとして深い関わりを持ってきました。しかし、農耕機械の普及や交通手段の発達で、一部の人々や地域との関係を除いて、今では疎遠な動物の一種となってきています。この状況は、実は日本だけの現象ではなく世界共通で、各国とも在来種の存続と確保などに苦心しています。そして、現在の世界各国では、乗馬、ホーストレッキング、情操教育、リハビリテーションなど、人とウマとの新しい「ふれあい」が試みられ開発されつつあります。

一方、21世紀に生きる人々は、ゆとりある暮らし、豊かな老後生活、自由時間の有効活用、テクノストレスの解消、自由で伸びやかな教育、環境保護などを希求しています。

そこで、市民参加型EXPOである『愛・地球博』の市民パビリオンを会場に「ウマに対する理解と共感を深め、そして、再び「ウマと人々がパートナーとして深い関わりを持つ環境」を探求し、「人と馬との優しい関係」を広く知らしめることを目的として開催いたします。

【トピックと演者】

第1日「馬は優しい動物」 馬について解説し、馬に対する理解と共感を深める

本好茂一氏 日本獣医畜産大学名誉教授、RDA Japan 理事長

青木修氏 日本装蹄師会

近藤誠司氏 北海道大学教授、RDA Japan 理事

Jo Pringle 氏 英国、RDA UK、理学療法士

Sharon May Davis 氏 オーストラリア

第2日「馬と文化」 馬が及ぼす歴史や文化などを示し馬の有用性や優秀性を考察する

吉永みち子氏 作家、RDA Japan 副理事長

小林皓正氏 アナウンサー

清水唯弘氏 歴史騎馬文化研究家

太田敏範氏 近代五種強化委員長

Mary Longden 氏 オーストラリア、FRDI教育委員会委員長

Brooke Dinning 氏 オーストラリア

第3日「馬と健康」 心身の健康におよぼす馬の働きなどを考察する

Gundula Hauser 氏 オーストリア、FRDI（国際障害者乗馬連盟）会長

徳力幹彦氏 日本大学教授、RDA Japan 理事

Amy Jiyoung Lee 氏 韓国、理学療法士

慶野裕美氏 愛知県、レモンクラブ

長谷川昌宏氏 山形県、山形県立総合コロンニー希望が丘

柴尾小百合氏 山口県、山口県障害者乗馬の会

恵光園ヒポクラブ 社会福祉法人恵光園（ビデオ発表）

第4日「人と馬との優しい関係」

3日間の講演や発表を通じて、障害者乗馬の効果や課題などをあらためて考察する

Manan Rukhaze 氏 グルジア、State Medical Academy of Georgia

Wang Wan Hua 氏 台湾、RDA ROC (Taipei) 事務局長

Nick Rodgers 氏 香港、RDA 香港プロジェクト・マネージャー

Rhona Young 氏 英国、作業療法士（ビデオ発表）

< パネルディスカッション >

参加国・地域：英国、オーストラリア、オーストリア、韓国、グルジア、台湾、香港、日本

【主な演者のプロフィール】

本好茂一氏 / Shigekatsu Motoyoshi (日本獣医畜産大学名誉教授、RDA Japan 理事長)

日本ウマ科学会、日本ペット栄養学会などを創設し、日本中央競馬会顕彰馬委員会委員、馬の防疫衛生実態調査検討委員(座長)、農林水産大臣獣医師免許審査会専門委員などの要職を歴任。わかりやすい解説と話術に長けた"ウマ博士"。

吉永みち子氏 / Michiko Yoshinaga (作家、RDA Japan 副理事長)

「馬に魅せられた女たち」「性同一性障害 性転換の朝」「麻婆豆腐の女房 赤坂四川飯店物語」など優しい女性の目線でありながら核心に鋭く迫る著作が多い。「気がつけば騎手の女房」で大宅壮一ノンフィクション賞受賞。政府税制調査会、郵政行政審議会などの委員を歴任。

青木修氏 / Osamu Aoki (日本装蹄師会)

装蹄師の教育に携わるかたわら、装蹄理論を確立するためバイオメカニクス(生体工学)の視点から馬の歩行運動の研究に従事。その成果は、国際学会や海外での講演を通じて普及している。

2004年に国際ウマ専門獣医師殿堂入り。

小林皓正氏 / Kosei Kobayashi (フリーアナウンサー)

ラジオたんぱの中央競馬実況中継、関東U局「中央競馬ワイド中継」の司会進行、週刊競馬ブック「競馬ワンダーランド」での連載コラムなどを担当。ラジオたんぱでの担当歌謡番組、テレサ・テンや春日八郎などのステージ司会で芸能の分野も精通している。社会福祉法人「子供の家こすずめ会」理事長。

徳力幹彦氏 / Mikihiko Tokuriki (日本大学教授、RDA Japan 理事)

「馬の歩行運動における骨格筋の働き」を長年にわたって研究。世界馬獣医学会と国際馬運動科学会の二つの国際学会で理事を務めている。美術にも造詣が深く、近年に巡った世界各国の美術館の数は60を超える。

近藤誠司氏 / Seiji Kondo (北海道大学教授、RDA Japan 理事)

研究のテーマは主に草食大家畜(ウマ・ウシ)の行動と管理システム。北海道大学附属牧場助教授、同大学院教授などを経て同大北方圏フィールド科学センター教授。原著論文のほか、「家畜行動図説」「ウマの動物学」など多数の著書がある。

Jo Pringle 氏 (英国、RDA UK、理学療法士)

1968年にRDA活動を始める。「理学療法士のための馬とりハビリテーション」を確立するなど第一人者であり、RDA Japan 草創期から指導者講習会やクリニックの講師として毎年来日し、現在のRDA Japanの礎を築いた「RDAマザー」である。

Gundula Hauser 氏 (FRDI (国際障害者乗馬連盟会長))

小学校教諭(一般/特殊学級両方)としての経験や理学療法についての知識を生かし、長年乗馬セラピーに携わってきた。オーストリア障害者乗馬連盟の理事、会長なども歴任し、2003年よりFRDI会長を務めている。

現在は主に治療教育的乗馬と軽乗に力を入れつつ、2つの乗馬センターを運営している。

Mary Longden 氏 (オーストラリア、FRDI 指導教育委員会委員長 馬術競技国際審判員 & コーチ)

国際的に活躍する馬術コーチ。アトランタパラリンピックではオーストラリアチームコーチ、シドニーでは審判員、アテネではカナダチームコーチを務めた。FRDI 指導教育委員会委員長、FEI (国際馬術連盟) 総合馬術審判員、IPEC (国際パラリンピック馬術委員会) 国際審判員、オーストラリア国内グランプリ審判員であり、特殊教育の修士号を持つ。

Nick Rodgers 氏 (香港、RDA 香港プロジェクト・マネージャー)

1980年から10年間BHS(英国乗馬協会)のシニア・コーチを英国にて務めた後、香港へ渡り、香港ジョッキークラブ乗馬部門の主任インストラクターを1995年から8年にわたり務めた。

香港ではジョッキークラブはRDAの支援団体であることから、縁あって現在はプロジェクト・マネージャーとしてRDA業務に従事。香港でのプログラム充実に尽力しつつ、アジアパシフィック地域の障害者乗馬発展と各地域連携に力を入れている。

【RDA ~ Riding for the Disabled Association ~】

「障害者たちにも健常者と同じように乗馬や馬車操作を楽しむことを提供し、健康や暮らしの質の向上を図ること」を目的として1969年に結成された英国に本部を置くチャリティー団体です。

英国国内に727のグループが登録され、24,900人のハンディキャップを持った人たちに乗馬の機会を提供しています。英国だけではなく、オーストラリア、ニュージーランド、シンガポール、フィリピン、香港、マレーシアなどでも同じ流れで活動が展開されています。

英国王室のアン王女が総裁を務めています。

【RDA Japan】

- ・1991年から始まった草の根的な小さな活動が1997年にRDAの海外メンバーとして承認を受け、1998年3月に「RDA Japan」を設立しました。
- ・2000年12月に改組して東京都から「特定非営利活動法人」として認証され、2004年12月には国内に約2万団体もあるNPOのうち27番目の『国税庁長官が認証する認定NPO』となりました。
- ・全国各地でRDA活動を行っているグループを支援し、各グループ間の協調、活動グループ設立に向けての助言などを行っています。
- ・現在の活動グループは北海道から福岡まで14団体あり、騎乗者は年間延べ約8,000名、彼らとともに活動するボランティア参加者は年間延べ約6,500名にもおよびます。
- ・北海道大学、日本獣医畜産大学、信州大学、麻布大学、帝京科学大学などとも連携して活動しています。
- ・指導者やボランティアなどRDA活動に参加する人たちの質の向上を目指して、講習会やインストラクター認定など人材育成事業を行っています。
- ・FRDI（国際障害者乗馬連盟）に加盟し、海外から障害者乗馬に関する情報の収集と提供をすると同時に「乗馬を通じた国際交流」も活発に行っています。

【障害者乗馬について】

「障害者乗馬」は日本ではまだ一部の人々の間にしか知られていませんが、欧米では障害者たちのリハビリとしてすでに定着しています。

馬に乗ることで身体の機能回復訓練になったり、豊かな感情の変化が見られたりといった効果が期待されているためです。また、リハビリ面だけに限らず、動物とのふれあい、スピード感、いままでに経験しなかった高い視野などを味わう楽しみの場ともなっています。

国際的組織としてはFRDI (the Federation of Riding for the Disabled International / 国際障害者乗馬連盟) が設立され、日本の団体を含む46の国や地域が加盟しています。

FRDIでは、統一したインストラクターの資格認定などの認定基準を2004年に制定しました。

各国、各グループにより方向性は少し異なりますが、いずれも共通していえることは「馬に接し、馬に乗ること、それ自体を楽しむことが重要であって、結果はあとからついてくる」という考え方です。

【なぜ馬がいいのか】

乗馬は老若男女、ハンディのあるなしにかかわらず、誰にでも楽しめるスポーツでありレクリエーションだからです。また脳幹を刺激する知覚刺激であり、効果があることがわかっています。

多くの理学療法士、作業療法士、医師、特殊教育者などの支援を受け大きな効果を上げています。

具体的な効果としては身体的、心理教育的、社会的なものが挙げられます。

身体的

馬が前進すれば身体は前後・左右・上下に揺れます。馬は10分間に1,000回にもおよぶ三次元運動を行なうといわれています。

この揺れと馬の体温が適度の緊張とリラックスを生み、騎乗者は自然に馬の動きに合わせてバランスをとろうとします。これが脳幹を刺激し、筋肉の発達や血液の循環を助け肺活量も増すなど、健康全般の促進につながります。

心理教育的

身体的リハビリ効果に限らず、心理教育的な効果もあります。

大動物と触れ合いながら今まで体験したことのない高い視野、スピード感を味わい、「馬に乗った」という満足感、「自分の何倍もある大きな馬を操れた」という自信が生まれます。

社会的

ボランティアたちとの交流が人間関係を豊かにする楽しみの場となります。

どの騎乗者も馬場を一周する間に緊張した顔が、おもいきりの笑顔に変わることでしょう。